

よりシンプルに生まれ変わったiPadOSとiOSのアップグレードワークフロー

このガイドでは、Jamf Schoolを使ってAppleデバイスをiOS 16またはiPadOS 16にアップグレードする方法をご紹介します。



最新のオペレーティングシステムにアップグレードする前に、使用中のソフトウェアとの互換性やOSの安定性について検証を行い、アップグレードが組織のニーズに見合っているかを確認しなければなりません。そのため、まずは**今すぐにアップグレードする必要があるのか**について考えてみる必要があります。



Jamf Schoolを使用すると、ソフトウェアのアップデートを最大90日間まで延期することが可能です。この管理機能を利用する場合、延長期間中はユーザによるデバイスのアップグレードはできなくなります。アップデートを行う時期が来たら、特定のiOSまたはiPadOSバージョンを導入することができます。この機能は、iOS 11.3またはそれ以降が搭載された監視対象のデバイスで利用できます。



アップグレードを執行する場合は、ユーザとIT部門のどちらが行うのかを決めなければなりません。

✓ ユーザが行う場合

デバイスの設定メニューからアップデートをインストールします。ITのサポートは必要ありません

✓ IT部門が行う場合

Apple School Manager経由で登録されたデバイスに対しては、モバイルデバイス管理 (MDM) コマンドを送信することでiPadOS 16またはiOS 16をダウンロードおよびインストールすることができます。ユーザによるアクションは必要ありません。

[🔗 iOSアップグレードにおけるベストプラクティスやJamf Schoolのワークフローに関して詳しく見る](#)

- 注意：
- デバイスにパスコードが設定されていない場合は、インストールを自動的に行うことができます。パスコードが設定されている場合は、アップデートはキューに追加され、インストールを開始するためのパスコードの入力をユーザに促します。
 - デバイスにiOS 15またはiPadOS 15を残しながら、重要なセキュリティ設定のアップデートのみを適用させることも可能です。これにより、IT管理者はセキュリティアップデートを見逃す心配をせずに、アップグレードの適切なタイミングを待つことができます。